主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	西村洋平

主 論 文 題 名：プロティノス魂論の構造と諸問題

（内容の要旨）

本論文が主題として取り扱うのは、3 世紀に活躍した新プラトン主義哲学者プロティノスの魂論である。本研究で私は、魂をめぐるすべてのテーマを網羅的に論じることはしないが、プロティノスが魂を論じるときの大きな枠組み・体系と、彼自身が重要だと考え繰り返し論じることとその問題を提示しようと思う。そこでまず、プロティノス哲学の体系において魂がどのような存在としてとらえられていたのか、また他の学派の思想と比較してどのような特徴をもっているのかを明らかにする。さらに、プロティノスの魂概念に特有の諸問題をいくつか取り上げて論じることで、彼の魂論の特徴を浮き彫りにする。またプロティノスは神秘主義者としても有名な哲学者であり、日本においてはとりわけそのイメージが強い。本稿のもう 1 つの目的は、そうした偏ったイメージの相対化にある。神的なものとの合一といった神秘体験がプロティノスの思想の重要な要素の 1 つであるのは確かである。しかし、私は彼の思想がギリシア哲学の伝統に根ざしたものであり、そのなかに位置づけて見てみなければ、プロティノス哲学のみならず、そこにおける神秘主義的な側面の重要性すら理解できないと考えている。プロティノスの思想の特徴は、彼の個人的な体験に還元されるべきではなく、むしろ古代から続く哲学的伝統のなかで把握されるべきである。

本論の構成はつぎのとおりである。第 1–2 章でプロティノスとその思想への導入を行い、第 3–4 章で魂の本質規定と魂の階層の全体構造を明らかにし、第 5–7 章で、プロティノスの魂論をめぐる個別的な問題を論じる。その各章の要約は以下のとおりである。

主題にとりかかる前に、まずはプロティノスという哲学者についての簡単な導入を行い、どのようにプロティノス哲学に接近したらよいのかを確認する（第 1 章）。プロティノスの生い立ちについては詳しく知られていない。しかし、彼がどのような人物であったのか、またどのように哲学に取り組んだのか、その著述スタイルや授業形式はどのようなものだったのかといったことは、弟子ポルピュリオスが記した『プロティノス伝』（*Vita Plotini*）に伝えられている。この伝記に基づいて、哲学者と教師としてのプロティノス像について簡単な解説をする（第 1 章第 1 節）。また、弟子ポルピュリオスによって編纂されたプロティノスの著作集『エンネアデス』の成立背景について説明する（第 1 章第 2 節）。つぎに、プロティノスの著作をめぐる技術的な問題について触れた。まず、プロティノスの著作に言及するに際して、ポルピュリオスがテーマごとに分

類した『エンネアデス』方式ではなく、執筆順を優先する参照方法を採用する。それは、プロティノスにおける思想の発展の可能性を排除せず、問題の連続に注意を払うためである。また、底本としたアンリ・シュヴィツァー版の出版事情や、出版途中や後に加えられた補足と訂正の経緯について整理した。さらに、プロティノスの論述の特徴についても論じた（第1章第3節）。プロティノスは、弟子たちとの議論や授業で読み上げられていた古代のテクストを前提にして省略的な書き方をするため、そうした背景が分からないわれわれにはかなり難解である。そのため本論文では、プロティノスが依拠するプラトンや、彼の論敵（主にストア派とペリパトス派）の議論を明らかにしながら、プロティノスの思想にアプローチすることにする。その準備として、プロティノスや「新プラトン主義」と呼ばれる思想潮流の思想史的な位置づけを概観した（第1章第4節）。プロティノス以後のプラトン主義の流れがそれ以前の中期プラトン主義と異なるのは確かだが、そこに断絶があるのでは決してない。プロティノスの思想もまた、ギリシア・ヘレニズム哲学の伝統に根づいたものであり、その連続性をとらえて初めて、プロティノス哲学の特徴が見えてくる。これが、本論文がとる基本的なプロティノス哲学への接近方法となる。

第2章では、魂論を理解するために必要なプロティノスの基本思想について概説する。まず始めに、プロティノス哲学の中核にある発出理論や、世界の形成原理であるロゴスについて解説した（第2章第1節）。発出とは、原因と結果についての新プラトン主義に特有の考え方である。原因は結果よりすぐれており、結果は原因に似ているとされるが、逆に結果が原因に似ているとは言われない。この一方向的な関係は上位の原因（形成原理・ロゴス）による結果の根拠づけ・産出として考えられ、諸存在は新プラトン主義特有の階層のうちでとらえられることになる。

つぎに、この発出や存在の階層化が、プロティノスにおいて二重活動理論という考え方によって支えられていることを確認する（第2章第2節）。二重の活動とは、例えば燃えるという火のはたらきが、さらに熱や輝きという派生的作用を生む場合である。前者の火に備わるはたらきは内的活動、後者の派生的なものが外的活動として理解される。外的活動は内的活動から離れるが、内的活動に依存する。それと同様に、発出のプロセスにおいても原因の内的活動が、それに依存しつつもそこから離れる結果を生み出すという仕方で理解される。

発出の仕組みについて解説した後で、プロティノス哲学の3つの存在階層について簡単に解説する（第2章第3節）。その3つの階層とは善・一、知性、魂であるが、それらが明確に提示される、第10論考「3つの原理的な存立について」（V, 1）を中心に取り上げた。これら3つの階層はすでにプラトンによって語られているのであり、プロティノスはそれを解釈しているに過ぎないのだという。たとえば、善・一という最高原理は、プラトン『国家』第6巻において「存在の彼方」（509B8–9, ἐπέκεινα οὐσίας）にあると言われる善のイデアや、『パルメニデス』第2部の第1仮定で語られる、認識されることのない〈一〉と結びつけられる。知性については、『ティマイオス』で世界を創出するデミウルゴスや、世界のモデルとなる生きものそのものと同一視

される。知性とは自己自身を知性認識するイデア・存在の総体として理解されており、その内部構造はプラトン『ソピステス』における5つの最高類によって説明される。魂については第3章以降で詳しく論じるので、第2章では第10論考で論じられることを概略するにとどめた。

最後に、プロティノスがプラトンから受け継いだ〈ある〉と〈生成〉の区分を取り上げた（第2章第4節）。これはプロティノスが世界をとらえるときの基本的な見方であり、可感的世界はつねに変転する〈生成〉であり、可知的世界はつねに同一にとどまり、真に〈ある〉と呼ばれる、プラトンのイデア的世界である。両者の関係は範型と似像という関係でとらえられ、〈生成〉は同名異義的にのみ「ある」と呼ばれる。魂はそれらの中間に位置するのだが、同名異義的にのみ「ある」と呼ばれる〈生成〉から目を向け直し、真に〈ある〉と呼ばれるものを認識することがプロティノス哲学の中心課題である。魂が〈ある〉をどのように認識しうるのかをめぐって、プロティノスには独自の、そして問題含みの思想がある。それは、魂の一部が知性にとどまっているという主張である。この魂の部分の問題について概説した。

第3章から本題の魂論に入り、まずは魂の本質がどのように規定されるのかを詳しく見る。プロティノスは魂が「本質存在」（οὐσία）であることを繰り返し強調する。本質存在としての魂は、〈生成〉とは区別された〈ある〉に属するものだという。魂は、〈生成〉に属する物体や物体に属する状態（πάθος）ではないのだとされる。さらにプロティノスは第4論考「魂の本質について 第1篇」（IV, 2）において、プラトン『ティマイオス』の解釈をとおして、諸存在を可分性と不可分性を規準に4区分する。完全に可分的な物体、可分的かつ不可分だが、物体に近いものとして内在形相がある。これらは〈生成〉に属する。他方、完全に不可分なものとしては知性があり、可分的かつ不可分だが、その知性に近いものとして魂があるとされる。これらは〈ある〉に属し、本質存在と呼ばれる。このように位置づけつつ、プロティノスは魂をペリパトス派が言う形相でも、ストア派が考える物体でもないものとしてとらえている（第3章第1節1）。

そこでプロティノスがペリパトス派とストア派に対してどのような批判を加えているのかを具体的に見た。まず彼は、ストア派の唯物論的な魂の存在規定に対して、感覚認識における把握の一性が不可能になるとして批判する（第3章第2節）。しかし、魂と身体の関係としては、混じり合うもの同士が自らの性質を失うことのないストア派の「混和」（κρᾶσις）理論の特徴を受け継いでいる。つぎに、魂を、生きているものの内在形相とするペリパトス派（とりわけアレクサンドロス）に対する議論を考察した（第3章第3節）。プロティノスがストア派批判のためにもちいる把握の一性の議論は、じつはアレクサンドロスから借用されたものである。認識論的な枠組みではペリパトス派の影響が非常に大きい。他方で、魂を身体から不可離の内在形相とする立場に対して、プロティノスは批判的である。他学派に対するプロティノスの複雑な立場を整理することで、彼が魂の「本質存在」として理解していることの明確化をはかった。

主　論　文　要　旨

第4章では、プロティノスにおける魂の階層の全体構造を明らかにした。万有・世界の魂、天体の魂、人間の魂、動物の魂、植物の魂など、魂には多種類ある。本論文では、万有の魂と人間の魂を主に取り上げる。プロティノスはこれらの魂が人間や万有といった何かに属する個別的な魂としてある限りでは多であるが、全体としては一であると語る。これがいかなる思想なのか、第8論考「すべての魂は一であるか」（IV, 9）を中心に考察した（第４章第1節1）。魂は、連続的にのみ一である物体や、種的に一性がとらえられる内在形相とも異なり、数的な一性をもつとされる。プロティノスは、魂が個別的なものとして多であるが、それぞれは可能的にすべてを含み、全体として数的に１つであることを、知識の例をもちいて説明する。ある知識をもっている人が、そのうちの１つを個別的に取り出して説明する場合、その取り出された知識は個別的であるが、その個別的知識のうちには知識全体が可能的に含まれている。あるいはその知識をもつ人においては、その個別的知識は全体の一部として現前する。そのように魂も、あるレベルにおいては全体として、すべてが一なる魂としてあるのだという（第4章第1節2）。それをプロティノスは〈全魂〉（ὅλη ψυχή）と呼ぶ。個別的魂はすべて、この全魂の部分なのである。この全魂の身分は問題となるが、私は知性のうちにある魂だと解釈した（第4章第1節3）。そして、プロティノスはしばしばわれわれの魂の一部が知性にとどまると主張するが、この部分こそが全魂の一部としてのわれわれの魂だと考えられる。

つぎに、万有の魂と人間の魂の関係をめぐって展開される、第27論考「魂の諸問題について 第1篇」（IV, 3）の議論を分析した（第4章第2節）。人間の魂も万有の魂も同等で、全魂の一部であると考えるプロティノスは、「われわれ人間の魂は、万有・世界の魂の一部である」とする説に対して批判・論駁を展開する。少なくとも現存する資料から、プロティノスは唯物論の立場にあるストア派の説を批判していると言える（第4章第2節1）。魂の本質をめぐる議論でも見たように、プロティノスは、唯物論的な立場では認識における魂の一性を説明できないといった同様の議論をもちいて、人間の魂が万有の魂の一部だと考えると、人間が受動したものを万有の魂が把握するという奇妙な帰結になるとしてストア派の立場を批判する（第4章第2節2）。最後に、万有の魂と人間の魂の関係をめぐり、なぜストア派の理論が批判されねばならなかったのかを考察する。万有と人間の魂の関係が射程におさめるのは、万有のロゴスあるいは摂理にしたがうという自然学的・倫理的問題と、受動様態の共有（συμπάθεια）という自然学的・認識論的問題である。私は、これらの2点においてプロティノスがストア派に非常に近い立場にあるために、唯物論的魂論を批判し、改めてプラトン主義的な枠組みで魂の関係を構築する必要があったのだと主張した（第4章第2節3）。

第５章以降では、以上の考察から得られるプロティノス魂論の全体像をもとに、幾つかの個別的なテーマを扱うことにする。まずは、第５章で本質存在としての魂と、内在形相の違いに着目

する。プロティノスは、魂の身分をめぐって物体に備わる内在形相や性質ではなく、独立した本質存在だと強調するが、それがどのような思想背景のもとに区別されているのか、プロティノスの性質論・存在論をとおして詳しく考察することで明らかにする。第 17 論考「本質について、あるいは性質について」（II, 6）において、プロティノスは二重活動理論をもちいて説明する。可感的事物の内的活動（燃えている火に備わる熱や輝き）は性質ではなく、その事物の本質存在を満たすが、そこから派生したものは単なる性質に過ぎないという（第 5 章第 1–2 節）。しかし、後期の著作第 43 論考「存在するものの諸類について 第 2 篇」（VI, 2）では、そうした見解を撤回する。可感的事物とは性質の寄せ集めであり、本質存在を満たすものはないのだという（第 5 章第 3 節）。解釈者たちは「本質存在を満たすもの」というペリパトス派由来の思想から、可感的な事物を性質に還元するプラトン主義的思想へとプロティノスはシフトしたのだと読むが、私はそうした読み方を批判した。プロティノスは、第 17 論考では曖昧にしか語られていなかった内的活動の身分を、後期の著作では明らかにしている。そう解釈した上で、可感的な性質を生み出すものとして、魂の内的活動あるいはロゴスが考えられていると論じた（第 5 章第 4 節）。そこには、プロティノスによるアリストテレス批判と、徹底したプラトン主義が見いだせる。

つぎの第6章において、第4章で示した魂の一性・多性というプロティノスの思想が独自の感覚論に反映されていることを詳しく見る。感覚の主体である魂は、物体ではないため、物体からの作用を受けることがない。魂は非受動的なのだという。その代わりに、身体器官が外部の諸様態を受動し、それを魂は形相として把握するという（第6章第1節）。それにもかかわらず、プロティノスは魂が対象を直接把握するという立場を主張する。もし魂が器官のうちに生じたものを把握するだけならば、外的対象をどうして感覚していると言えるのか問題となる（第6章第2節）。

それに対してプロティノスは、感覚器官と感覚対象の間で生じる様態の共有（共受動）という理論をもちいて説明する（第6章第3節）。満ち欠けする月と満ち引きする潮が、離れていながら同様の様態を共有するように、器官と対象は同様の様態を共有する。つまり感覚器官における受動は、それを把握する魂に、外部の対象と一緒に共有されている様態なのだと報告するような受動なのである。そのようにして魂は外部の対象を把握することができるという。そうした共受動が可能なのは、身体器官や感覚対象が属する万有全体に1つの魂が備わっているからだとプロティノスは主張する。プロティノスの感覚論が、以上のような彼独自の宇宙論や自然的世界の理解に基づいていることを明らかにし、哲学史的にもかなり特異であることを示した。

最後に魂と知性の関係について第 7 章で詳しく論じる。魂が知性とは異なる点は、魂が思考のうちにあることだとプロティノスは言う。思考とは、知性のようにすべてのイデアを一緒に、自

己自身として認識することができず、それが扱う対象は個別的であり、認識のためには時間や推論を要する。ところが、プロティノスは知性と同じような認識が魂にも可能であるとも述べる。とりわけ第 49 論考「認識する存立とその彼方のものについて」（V, 3）では、思考にも知性的な認識が認められることになる。そこで問題となる知性の認識とは、すべてのイデアを自己自身としてとらえるような自己認識である。まず、そうした自己認識を批判するセクストス・エンペイリコスの懐疑主義的議論とともに、プロティノスが探求する自己知の問題について概観した（第 7 章第 1 節）。知性が実現する完全な自己知は、「私は〈ある〉である」と表現され、主体と対象、それらを結びつける認識活動がすべて同一であるような認識である。他方、魂の場合、外的なものを対象とする感覚のうちには、そのような自己認識は見いだされない。自己の外部の認識だからである。だが、魂のうちで独立にはたらく思考には、ある種の自己認識が認められる。それは、知性に由来し、知性に依存するものとして自己自身を認めることである（第 7 章第 2 節 1）。これは、完全な自己認識を実現できていないことであり、いまだ真の自己を知らないことを自覚することでもある。さらにプロティノスは、もう 1 つ別の魂の自己認識について語る（第 7 章第 2 節 2）。それは、魂が知性になり、知性として完全な自己認識を実現することである。これが可能なのは、魂の一部が知性のうちにとどまっているからだと考えられる。知性のうちにとどまる部分は、魂による知性的な認識（思考）の根拠なのである。こうした知性と魂の階層を曖昧にしてしまう考え方は、後の新プラトン主義哲学者たちに大いに批判されることになる（第 7 章第 3 節）。また、彼自身の神的なものとの合一といった神秘体験に基づいたものとして、上述の思想は解釈される。だが、それはプラトン解釈の所産だとも言える。魂の知性との合一は、『パイドン』で語られる魂の身体からの浄化というプロセスの先にある。身体的なものから目を向け変えて魂を配慮することをアテナイ人に訴えたソクラテス以来の哲学の伝統は、異なる形ではあるが約 700 年を隔てたローマのプロティノスのなかにも息づいている。プロティノスにとっても、哲学の最終地点は知識の獲得であり、それはイデアの認識である。プロティノスによれば、それは知性となることによって実現される。プロティノスは、こうしたプラトン哲学が、最終的には彼自身の神秘的な体験と合致すると確信していた。彼のプラトン主義、すなわち彼の哲学の中心テーマとしてあったのは、探求する主体である魂にほかならない。

Keio University

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	NISHIMURA, Yohei 西村洋平

Title of Thesis:

The Soul in Plotinus' Philosophy——Its Structure and Problems

プロティノス魂論の構造と諸問題

Summary of Thesis:

My thesis is focused on two general topics that are indispensable for understanding Plotinus' theory of the soul. One is the essence of the soul, and the other is the structure of a psychic stratum that constitutes the third level of the hierarchy of beings after the One and the Intellect in Plotinus' philosophy. I preface these subjects with general introductions to Plotinus, his works, and his philosophy.

At the start of the main sections, I analyze how Plotinus conceived of the essence of the soul. By defining the soul as an essential being (*οὐσία*), he contrasts his position with that of the Stoics and the Peripatetics, the two major philosophical rivals of Platonism at the time. The Stoics regarded the soul as the body, and the Peripatetics defined the soul as the form of the living body. For Plotinus, however, no body or form could be said to be the essential being (*οὐσία*). The soul qua *οὐσία* is incorporeal and independent of THE body, as Plato holds in the *Phaedo* and elsewhere. Thus, Plotinus champions Platonism.

I then present the structure of the psychic hierarchy in Plotinus' ontology. There are many souls, such as the world soul, human souls, animal souls, plant souls, and so on. However, Plotinus says that all souls are essentially one. Unlike the body, which can be one only in continuity, and unlike quality, which is one only in kind, the soul is one in number. When Plotinus insists that all souls are one, this numerical oneness is intended. The soul viewed as one is called "the Whole Soul" (*ὅλη ψυχή*), of which other souls, such as our human souls and the world soul, are parts. I interpret this Whole Soul to be in the realm of the Intellect. The crux of Plotinus' theory of the soul lies exactly in this: a part of our soul that corresponds to the Whole Soul remains in the realm of the Intellect.

I discuss a number of specific problems that issue from the conceptions of the soul described above. First, I take up the notion of sensible quality or form. Plotinus regards the soul and its rational principles (*λόγοι*) as producing sensible qualities.

Next, I discuss Plotinus' theory of sense perception, describing the two important notions that explain the process of sense perception: the impassibility of the soul and the sympathy, generated by the world soul between a sense organ and a sense object.

I close by examining the highest cognitive power in the soul, namely, discursive thinking (*διάνοια*). Plotinus seeks the possibility that the discursive thinking of the soul accomplishes a self-knowledge of the Intellect, in which a subject (Intellect) and its objects (Platonic ideas) are perfectly one. In admitting its possibility and mitigating the gap between the soul and the Intellect, Plotinus differs from other

Platonists. This divergence can be interpreted as being based on Plotinus' own mystical experience, according to which his soul was purified from his body and unified with the divine during his life. It is also based on his interpretation of Plato's *Phaedo.* I conclude that in Plotinus' original notion of the soul derives from his own experience and his interpretation of Plato.